



花立（井波別院瑞泉寺 報恩講）

我身

WAGAMI

第7号

2022年4月1日

題字：常如版の御文

「人々に寄り添う」

井波別院瑞泉寺輪番 常哲生

まだ新型コロナウイルスの影響が断ち切れず、感染への懸念から、寺院活動にも変化が及んでいます。

今、寺院は社会や地域とのつながりを維持し、悩み事を抱える人々の不安に寄り添う活動をするよう委ねられている様に思います。

「寄り添う」と言葉でいうけれど、それはどういったことをいうのでしょうか。広辞苑にはぴたりとそばへ寄るとあります。「寄る」とは空間的や位置としてということのほかに、心理的に引きつけることもあります。

昨年は宗祖親鸞聖人が「和國の教主聖徳皇」（聖徳太子は日本のお釈迦様）と仰がれた聖徳太子が薨去（こうきよ）されて千四百回忌という大切な節目の年でありました。

飛鳥時代に太子が創建された奈良・法隆寺や太子の御廟のある大阪・觀福寺など各地で法要や閑運行事がお勤まりになりました。

千四百年という時の流れの間もずっと、太子の広めた仏教への思いに多くの人々が引きつけられてきた証でしょう。

親鸞聖人は太子を、人々に寄り添い、迷いから救う観音さまのように導いてくれる、大切な方と慕われました。親鸞聖人の時代には太子はすでに存在されていないにもかかわらず、聖人の心の中では大切な存在であつたのだと思われます。実体は無くとも聖徳太子を仏様として敬

い、身近に感じていたということです。

先達の方々は、お寺で親鸞聖人の教えをとおして太子の「篤く三宝を敬へ」のお言葉をいたたく時、お互に協力し合い、代々お仏事を受け継いでこられました。教えをいたたく場所を大切に丁寧に清掃し、護持に努め、深い信仰をもつて法義相続を行つてこられたことは太子信仰に寄り添うことでもあつたと思うのです。

近年では生活の通信環境の整備が進み、昨年は井波別院太子伝会の絵解きや法要の様子をユーチューブにてライブ配信させていただきました。いつでもどこでも音楽や映像に接することが出来る便利な世の中です。自分の都合のいい情報はどんどん集まります。しかし、そうでないものに触れる機会は減り、意見の根拠となる事実や知識が共有されず、互いに別のものを見てているようになります。しかし、ある一面ではこうした近くの方々とつながりにくくなるような気配のする世の中になつても、時を超えて太子の願いにお応えするご縁をつないでいくことができる一人になれるのではないかでしょうか。仏さまの教えは、私たちの日々の生活中に寄り添つてあるはずです。その存在に気づかせていただくことで教えに導かれていることを喜び、お仏事を実践する人々が現れてくださることを念願しています。

高岡教区教化委員会

一〇一八年五月八日 於 高岡教務所

第三回

同朋会運動の願いに学ぶ

講師 東京教区淨安寺 木名瀬 勝 氏

かつて高岡教区では、お寺といつよりも地域を中心に、お講が盛んに當まれていたと聞いております。しかし、現在そのお講も、衰退の一途をたどっているといつても過言ではありません。私たちにとって大事で身近な聞法の場が失われつつあるのです。今こそ僧俗が協力しあって聞法の場を開いていくこと、またその担い手が誕生することが願われています。

そこで、今年度の同朋の会推進部門では、同朋会運動の願いや目的を学ぶことを通して、課題を確かめ、私たちの新たな一步となることを願つて、下記のとおり、学習会を開催いたします。

(開催趣旨より抜粋)

茨城という土地は、富山県をはじめ北陸地方とは違つて、あらゆる宗派がバランス良く存在するという感じです。「バランス良く」という意味は、江戸時代に水戸光圀の宗教政策によつて、道場レベルの小寺院が廃止されたり、統合されたりして均衡しているということです。

また、中臣、藤原一族の祭神である鹿島

前回までの講義を受けて、「真宗本廟が本願を証明している」「悲惨な現実に本願がはたらく」「人として出会つていいのか」「異なるを歎く」について、より詳しく聞きたいということと、「講師自身の真宗との出会い」も併せて話してほしいというふうに連絡をいただいております。

ところで、一年前の私はまだ大谷派宗務所の職員として、名古屋教区で駐在教導をしておりました。それから八月に退職して故郷である茨城県の水戸に帰り、今はこのように法話に招かれるということもありますが、近所の会計事務所で嘱託職員として働いております。

■宗務職員を辞めて見えてきたもの



講師 木名瀬 勝 氏

神宮の信仰も強いところです。あらゆる宗派があるということは競争原理が働いて教えの違いが際立つかというと、逆でして、ほとんど神仏混交して因習、習俗といふことに近いのです。なんとなく仏教ってこんな感じ、ということなのです。そのように環境が大きく変わり、職場でパート勤務のお母さん方と仕事をしたりしながら、今まで自分が宗門の中でどつぶりと身を据えて聞法してきた十五年間とは何だつたのだろうということが問いかけてきます。

そういうことで思っていますのは、今回どこに話が集約するのか、何が本当に自分に

とつての問題なのかといえば、本願つて何なのだとということに尽きるのではないかと。いただいた意見もありますね。「真宗本廟が本願を証明している」「悲惨な現実に本願がはたらく」について聞きたいと。もちろん親鸞聖人があきらかにしてくださった浄土真宗の要というのは本願です。本願は一番大事な要の言葉です。けれども、私たちはその言葉の周りをうろうろしている。「うろうろ」というのはどういうことかというと、一生懸命本願を形作ろうとしているのでしょうか。本願とはこういうものであると簡単に言えることではなくて、それが言えたらすつきりしそうですが、例え彫刻のようなもんです。作曲や作文などの創作も同じでしようけど、仮像を作り上げるとしても、形が最初からはつきりしているのではなく、削りながら姿がだんだん見えてくるということが仏師にはあるのでしょうか。一本の丸太を削っていくと自ずから姿が現れてくるようになります。

本願は一番大事な要の言葉です。けれども、私たちはその言葉の周りをうろうろしている。「うろうろ」というのはどういうことかというと、一生懸命本願を形作ろうとしているのでしょうか。本願とはこう

心というのは相手の頭の中をいくら解剖しても見えてきません。心はわからないですね、相手の頭の中をいくら探つても。私たちがそれを受け取つた時に感じるものですからね。ですから一生懸命仏教辞典を引いて本願を調べたら、説明はあるでしょうけど、それで自分の生きる力にはならないですわね。例えば愛情という心を受け取つて、温かみを感じて初めて生きる意欲が湧いてくるものでしょうから。

■胸に手を当ててよく考えてどうりと

私も本願という言葉の周りをうろうろしながら、諦めずにきちんと押さえていき

本願について考えることでは、い

つも祖母の言葉を思い出します。これは真宗本廟の同朋会館にいました時に、部長代理でたまに奉仕団の結成式の挨拶をしましたが、その中で何度か話したことです。

私が子どもの頃、夏休みに田舎のじいちゃん、ばあちゃんのところへ遊びに行くと、窮屈な街中から解放されて大暴れしていましたをしたものです。勝手に鉄や一輪車とかを持ち出してそこらじゅうに穴を掘って、そのまま道具を放り出して忘れてしまったとか。田植えの時期に溜めている水を、あぜを崩して「ダム決壊」とか叫んで遊んでいたのです。当然じいちゃんに見つかり怒鳴られます。「お前は何をやつてるのだ、馬鹿野郎」と尻を叩かれて納屋に閉じ込められた。

ところが、ばあちゃんの方は「どうして

こんないたずらをするんだ」ということを言わないのです。代わりに「胸に手を当ててよく考えてごらん」と一言だけで、そのまま黙っている。そうすると、じいちゃんに「お前がやつたんだろう」と言われた時には、「どうやって言い訳しよう」とか「何と言つたら怒られないかな」とか、頭で考

えるんですよね、一生懸命に言い訳や理由を。

しかし、ばあちゃんは胸で考えろと言うわけです。私は子どもの時には、その言葉の意味はわかりませんでしたが、同朋会館での生活、あるいは真宗の教えを聞くというのを自分なりに受け取った時に、ばあちゃんの言葉を思い出しました。

どこで考えるかと言つたら、ふつう頭で考えるということですわね。ところが「胸に手を当ててよく考えてごらん」と言われた時にふと感じたのは、嘘をついている自分がいるものの何か痛ましさというか、嘘をついている自分というのは何かいやらしいなとか、漠然とはしてますが、痛みとか恥ずかしさの感覚です。

ですから、なるほどなと気づきました。頭で考えたら損得しか出てこないのかもしれません。なぜなら、頭は計算機なので損得の計算が得意なんです。そして、善いか悪いかです。こうすれば善いだろう、こうやつたら悪いかなと。都合が善い悪いかなんですね。

ところが、「胸に手を当ててよく考えて

ごらん」と言われた時の「胸」とは、何か「嘘か真か」ということを考える場所ではないかなと。ではどうして手を当てるのかと言えば、心臓の鼓動を聞きながら考えろということでしょう。鼓動を聞きながら考えるとは、死んでいく身から、老いて病んで死んでいく身、そういうところから考えてごらんと。それはまた独りで生まれ独りで死んでいく孤独の身ということでしょう。そこをはずしてしまうと、言い訳して損得の計算ばかりして人生が終わってしまうぞと。そんなことをばあちゃんは言いたかったのかというふうに思いました。そんな話を結成式の挨拶でしていました。

■浄土教の特質は「物語」形式にある

ですから、どうしても真宗を学ぶ、仏教を学ぶというと、やはり頭で考えようとしてしまうのですが、そういう人間の考え方の問題を知つて、浄土教は物語形式をとつていると私は思っています。それこそが浄土教の特質であり要であると。

もちろん大学で真宗を学ぶ時には、仏教

学を基礎にしてきちんとお聖教を開いてやります。論文が書けるように言葉の定義をして、論理として相手に説明できるようにします。それはいわば大学教学という一つの真宗の学び方です。しかし、普段の現場の、お寺の住職の教學というものが別にあるのではないでしようか。浄土真宗の教學には、大地に根ざしている田舎に伝わつてきたものもあつたわけです。それは、仏教の歴史において後から出てきたものなのか、枝葉なのかというとそうではなく、仏教が生まれてくる、あるいは仏教が再生するような土台ではないでしょうか。

お釈迦さま在世の時に教えを聞いた上足の弟子、阿羅漢の人たちは知識人ですから、釈尊の教えを整理した學問的な仏教はちゃんと言葉にも残されてきたわけです。そうなると、文字も持たない人たちの中で伝えられていた仏教がもしあつたとしても、言葉としては残つていないことになりますよね。ではそのような教えは謎のままでわからないのかと言えば、それが大乗仏教として歴史の表舞台にあらわれたのだろうと想像します。「大乗仏教として」ということは、

つまり『無量寿經』が生まれたという意味ですが。現代では「神話」と見なされてしまったような經典の内容は、実は釈尊を産み出した歴史や仏教の土台を表そうとしている世界観なんだと思います。

私が十五歳の頃、村上春樹さんの小説を読んだ時に、「メタファー」という言葉を知りました。隠喻法です。「あなたは太陽だ」という使い方ですね。春樹さんの場合は小説全体がメタファーであつて、羊男も地下の異世界も、ユングが想定するような人間の集合的無意識の世界を表現しようとしているんだと思います。

物語ですね。私たちはみんな頭でつかちになつてるので、教えを聞いても頭で止まってしまうわけです。聞法しても「なるほどそういうことか」と頭にある分別のフィルターに引っかかってしまって、言葉が心の奥に届かないのです。そこが私たちの教学の問題であり、教化の課題だと思います。わかりやすく説明して理解してもらつて「いいお話をした」と評価されれば教化になるのか、というね。フィルターをどうやって突破して、私たちの心の底にあ

る願いを揺さぶり共鳴させるのか、そういう力が物語はあるんでしょう。

みなさんもご存じだと思いますが手塚治虫さん原作の『ブツダ』という漫画があります。私がお釈迦さまを知ったのは、十八歳の頃、この『ブツダ』を読んだ時なのです。物語はどんな場面から始まるかというと、ウサギとキツネとクマさんが、雪の中をさまよつて衰弱しているおじいさんを見つけて、その人を何とか助けようというところから始まります。キツネは木の実を、クマは川魚を探してきましたが、ウサギだけは食べ物を見つけられません。申し訳な

さそうに耳を垂れて、火を起こすようおじいさんに頼みます。仲間と老人は何をするのかと見守つていると、なんとウサギ自身が火に飛び込むんですよね。私は驚きとともに涙を流した。

これが私と仏教との出会いです。「何だ、仏教というものはとんでもないぞ」と叫びたいような衝撃を受けたんです。これこそ物語の真髄でしょう。小賢しさという頭の分別を突破して一気に胸に届く力が、物語やメタファーにあるんですね。

もちろん、病院で処方される薬のように即効性がある話だけではなく、漢方薬のように飲み始めは本当に効いているのかなど疑うような効果もありますよね。繰り返し聞く中でじわじわと静かな感動が心の奥に染み入つていくような力もあります。それが浄土教の伝統である聞法なのでしょうし、田舎の人々である真宗門徒に伝わってきた教えではないでしょうか。

阿弥陀仏を「親さま」と呼んだり、辛い現実に直面した時に、「阿弥陀さまの促します」「ご催促です」と表現したりね。あるいは、人生の苦悩を個人的な経験に閉じ込めずに、「法藏菩薩のご苦勞」として受け止めるような世界観であったり、「おかげさま」という、自分の存在の背景を感覚している言葉であつたりと。そういうところに、現代人への教化を考える手がかりがあるのかなと思います。

■ 「いつか」ではなく

「すでに」本願の中で

真宗を学び始めるに、本願あるいは浄土といふことが自分とどういうふうに関わつて、それは二十九歳で法然上人に出会つた時かなとか、流罪になつて越後の民衆と出会つた時かなということを考えるのです。

ているのががよくわからない。それで一生懸命本を読んで理解しようとし、納得できたら「いつか」本願や浄土に出遇えるのだろうと思ってやってきました。ところが、よくよく聞法して気づかされたのは、「すでに」なんですよ。すでに本願の中で悩んだり苦しんだり、あるいは「あつ、わかつた」と思えることもありました。自分は大学時代から慢性軽症鬱状態で生きていましたから、そこから解放されたように喜んだり、しかし、唯円さんと同じく、「念佛申しても喜びの心が起らなくなりました」というふうに落ち込んだりしてきました。それらすべてが、すでに本願の中での出来事であつたということなのです、あとから気づかされたのは。

それ、聖人の俗姓は藤原氏、天児屋根尊二十一世の苗裔、
（『真宗聖典』七一四頁。以下、『真宗聖典』からの引用は頁数のみ記す。）

ところがそうではなくて、親鸞聖人の生涯を学ぶ時も同じなのです。親鸞聖人の出自です。どういう祖先の系譜から生まれたのかという血筋です。天照大神の子孫である皇族を支えるために、神から役割を与えられた天児屋根命の子孫が藤原氏の一族なので、親鸞聖人のもとを辿れば神々の系譜につながりますよ、ということです。

しかし、その神道という一つの民族宗教を超えて仏教徒として生き、最後は寝たきりになりながらもナンマンダブツと称えて、

すべてが本願のはたらきによる歩みなのだと教えられるのが『御伝鈔』であり、『御絵伝』の「絵解き」なんですね。

ですから、前回の講義で話が中途半端で終わつてしまつたところなので、もう一度確認しますと、『御伝鈔』は、

「念佛の息たえましましおわりぬ」と親鸞聖人が入滅なさる。神の子孫として生まれ、そして名号そのものとなつていかれた。それすべてが本願の中の生涯として描いているのが『御絵伝』ではないでしょうか。そこで親鸞聖人の「非僧非俗」という生き方を考えることも併せて問題提起したわけです。

明治期に近代国家になつても、世襲による統治者である君主と、従属する国民である臣民の関係は変わりませんね。そして現在は國民主権となつてはいますが、構造は同じなんです。私たちの思想、文化、倫理すべてがその構造を支えていますから、実は自分が従属する国民であつて、主体的な思考を奪われていることを自覚していく言葉として「非僧非俗」は大事だと思つています。

■「廟堂に詣す」そこには私もある

先ほど「入滅」と表現したわけは、亡くなつて親鸞聖人の生涯は終わりかといううそではないからです。親鸞聖人の物語はずつと続いていき、本願ははたらいていく

のです。

『御伝鈔』の最後のところですが、親鸞聖人が亡くなつたのは弘長二年で一二六二

年の十一月二十八日ですね。今でも真宗本

廟の報恩講の御満座の日になつています。その後すぐに京都の東山の鳥部野の大谷と

いうところに、遺骨を埋葬し笠塔婆を一本立ててお墓を作つたのです。大谷というところの土地に最初親鸞聖人のお墓を建立したのが大谷家の由来となつたと言われております（七三六頁）。

そして十年後に吉水の北の辺りに遺骨を

移したのです（七三七頁）。今の円山公園

の辺りです。なぜかというと、関東のご門

弟が毎年親鸞聖人の命日に一ヶ月くら

いかけて馳せ参じるわけです、米一升を背

負つて。例えば親鸞聖人の孫の如信上人は、

當時茨城県の北部から福島県にまたがる地

域で活動されてましたが、お米とご懇志を

集めながら報恩講を勤めるために毎年京都

に参るんですね。その時に使用したとい

ます。

そして一週間以上お勤めして、親鸞聖人

の言葉を思い起こしながら語り合つ。まさに、

おのおの十余か国のかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御こころざし、ひとえに往生極楽のみちをといきかんがためなり。（六二六頁）

を続けていたわけですよ。それを十年間ずっとお墓を守りながら門弟の姿を見ていたのが、親鸞聖人の娘の覚信尼さんですね。

そこで彼女が私有地を提供し、みんなの懇志によつてお堂を造つて、自分が受け継いだ親鸞聖人の御真影を安置して集える場所にした。これを大谷廟堂と呼んで、真宗本廟の原型となりました。それが「吉水

の北の辺に、遺骨を掘渡して、仏閣をたて影像を安ず」（七三七頁）という部分です。

六角堂を建てて御真影を安置した。そして、

此の時に当りて、聖人相伝の宗義いよいよ興じ遣訓ますます盛りなること、頗る在世の昔に超えたり。（同上）

と、親鸞聖人の在世の時よりもますます真宗が繁盛しているというわけです。その次ですが、親鸞聖人の「報謝を抽^{ひき}する輩、緇素^{しきそ}・老少、面々あゆみを運びて、年々廟堂に詣す」（同上）とあります。「緇素」というのは僧俗ということ。「僧侶も在家の者も」という意味です。「老少」というのは、「歎異抄」にも「弥陀の本願には老少善惡^{じょうぜんあく}のひとをえらばれず」（六二六頁）とあります。が、「老人も若者も」と私は読んでいたのですけれども、そうではなくて、人間の経験を問わないという意味だと思うんですね。人生経験を積めば念佛がわかるとか、知恵才覚を持てば本願に出遇えるとか、そういうことではないのです。

いじめに遭っている中学生が、「ぼくは何のために生まれてきたのか。なぜ人間は傷つけあうのか」と心の中で叫ぶ。この問い合わせが本願から与えられた問いなのです。

そして「面々あゆみを運びて、年々廟堂に詣す」とあります。私は真宗本廟に勤めて、奉仕団や報恩講の団体参拝も含めて、全国から緇素・老少、面々歩みを運んでいる人たちの姿を見ていただけだったのかもしれません。仕事として案内したり説明したりする立場としてですね。ところが、ある日御影堂で、そういう参詣者と並んで御真影に合掌していた時、「あつ、自分はすでにここに入っているんだな」と気がついたのです。大谷廟堂を昔の話だと思つて理解していたけれども、「年々廟堂に詣」している「面々」は自分ではないかと。

■『御伝鈔』は本願の人間像を描く

それなんです。本願にいつ出遇えるのだろうとか、本願とは何だろうと心の中を探したり、淨土はどこにあるのだろうとか、いつかどこかで、と考えるのではなくて、すでにそこに自分も入っていたと気がつくというか、驚いたということですね。昔からたくさんのご門徒が参っていたのだから、ということではなくて、自分もそういう

う参つている一人ひとりに連なつてているのだと。長い歴史の積み重ねの上で、とうとう自分のところに教えが届いているという、そういうことを感じました。

『御伝鈔』は親鸞聖人の曾孫^{ひまご}の覺如^{かくにょ}上人^{じょうにん}が、親鸞聖人の権威化、神格化という意図をもつて作ったとも言われていますけれど、歴史というものはそういう個人や組織の思惑^{おもわ}を超えて生命のように動いていくものですからね。

ですから『御伝鈔』というのは、本願がどういうふうに人生を仏道にしていくのか、あるいは現実になつてはたらいているのか、その具体的な人間像を表現しているのだと思います。本願が一人の個人を人間として育していくといふんでしょうか、成就させていく、その具体的なモデルとして親鸞聖人が描かれている。

しかし、それは『御伝鈔』の拝読や『御絵伝』の絵解きというものを通して、実は私たち自身が同じように本願によつて歩んでいるのだということを自覚させようとしてくださつてゐる。それを報恩講で確かめる。あるいは毎月二十八日の親鸞聖人の

御命日にお寺に集まつて、それを確かめる。毎日の生活の中でも『正信偈』^{しょうしんげ}をお勤めして、自分がすでに本願の中で生きているのだということを、真宗門徒は生活習慣にして確かめているわけです。

■真宗門徒の生活を習う

これは私自身が同朋会館での生活によつて教えられたことです。本願の仏道を私たちに生活習慣として与えてくださつてゐる。これを仏教の言葉では「行儀」と言うそうです。行儀が良いとか行儀が悪いとか言いますよね。行儀というのは道理に則つた作法のことです。

例えば、食事や睡眠などの習慣も作法と言えますので、それが道理に背いていれば糖尿病や高血圧症とかになつていくし、生活を正しい作法に変えなければ病気も治りませんね。生活習慣とはそういうことでしょう。

では、真宗門徒の行儀とは何かと zwar、毎朝「法藏菩薩因位時」と法藏菩薩の物語を聞いて、仕事に行く。「あー今日は取引

先と厳しい商談か」とか「嫌な上司と打ち合わせか」とかつぶやきながらね、世間に飛び込んでいくわけでしょう。世間とは損得という経済と勝ち負けという競争の世界です。この世間も人間が作った物語の世界ですね。出世間の法藏菩薩の物語と世間の物語という二つの世界の往復運動が、真宗門徒の行儀ではないでしょうか。

出家仏教というのは一方通行ですね。

受戒して世間から出て比叡山に籠り菩薩行をするためです。仏の悟りを得るまで菩薩の五十二階位を登りつめなければなりません。それに対して、法藏菩薩の物語と世間の物語との往復運動が真宗門徒の行儀だという意味は、お淨土と穢土との往復運動ということです。私たち真宗門徒にとつては、よくわからんけどキンキラキンとした世界を目指しているとか、死んであの世に行くとか、そんな将来の話ではないですもんね。

お淨土はどこかというと、ご本尊のある場でしよう。みなさんのご家庭のお内仏もそうですし、本堂のお莊嚴もお淨土ですし、真宗本廟もお淨土。ですから、毎日朝晚お淨土に触れて穢土に出て行く。正確には、

穢土に出て行くんだということがはつきりすることですね。淨土がはつきりしないのに穢土がわかるはずがない。淨土を知らないければ疑うこともない当たり前の世の中があるだけです。



同朋会館で奉仕団の生活をすると「い」と

とは、そういう真宗門徒の生活を実践的に習うためなのです。奉仕団というのは、朝晩お勤めして、そこで第一回目にもお話ししたのですけども、二泊三日の二日目のお夕事から和讃が代わります。最初は「弥陀成仏のこのかたは」次第六首の和讃でお勤めしますけども、一日目のお夕事から、

南無阿弥陀仏をとなうれば

他化天の大魔王

釈迦牟尼仏のみまえにて
まもらんとこそちかいしか

(四八八頁)

と代わります。「他化天の大魔王って誰ですか」という話でしたね。どうして日程の後半から和讃が代わるのかというと、真宗本廟に参つてお淨土に触れて、次に帰る準備が始まるんですよ。お淨土へ参つて穢土に還ると言いますけど、穢土はどんな場所かというと他化天の大魔王の支配する世界だというふうに。

■浄土が私たちに穢土を教える

私たちがものごろついた時にはすでに存在して、自分が死んでいなくなつても変わらずに続いていくだろうと思つていてこの世界。人生つてこんなもんかなとか、あるいは何とかならんものかなあと、もがきながらも、とにかく適応して生きていくしかないと思い込んでいる社会。苦しみながらもみんなの生き方と同調して、無病息災を祈つて少しでも居心地のいい環境を求めて生きていくしかないようなこの世の中。これがお淨土に触れる前の日常生活です。これがお淨土に触れる前の日常生活で

す。奉仕団といふことでいえば、「京都に行つてきまーす」と出てきた世界ですね。ところが、真宗本廟にお淨土参りをすることによって、自分たちが今まで生きてきた日常世界がどういう場所であつたのか、私は他化天の大魔王に支配されていたのだと思えられるわけですね。穢土におつたんだと。京都の本山にお参りして、「ありがたいねえ」とか「やれやれ雑魚寝して疲れなねえ、早う田舎に帰るか」と、もとの生

参つたとは言えません。それでしたら観光旅行と一緒にしよう。懐かしい家に戻るわけではなく、これから自分らが帰る場所は他化天の大魔王に支配された世界だったんだなど気づくのです。

ですから、お淨土はどんな場所かとか、そこへどうやつたら行くことができるのかと、お淨土の方ばかりに目が向いてしまいますけれども、お淨土を学んだら、私たちが普段生きている世間というものが穢土であるとはつきりしてくることでしょう。なんて自分は恐ろしい世界にいたんだろうと。

あるいは、本来持つていたであろう人間に生まれてきた願いというものを忘れて、なんだか畜生のように縛られて従属して、満足したいと思いながらも空回りしながら虚しく時間を過ごしてしまった、その世界の真実が少しだけ垣間見えた。損得と善惡の欲望に振り回されて、それが自分の願いだと思い込んで人生を浪費してしまつて生きている世界なんだなあと、そういうふうに私が生きている世界が穢土であると教えられてくるということですよね。

毎朝お勤めしている『正信偈』は、この

穢土というものを「海」として教えてくださっています。

如來所以興出世
五濁惡時群生海

唯說弥陀本願海
應信如來如實言

(二〇四頁)

そうすると「五濁惡時の群生海」とはどこの世界だろうという疑問が生じますか。なかなか疑問にならんから、「如來如實の言を信ずべし」とねんごろに説いてくださっているのでしようね。これから始まる

あなたの生活は五濁惡時の群生海やぞ、といふことを私たち毎朝毎朝聞いているわけでしょう。

ここで親鸞聖人は、美しい響きで韻を踏んで、弥陀の「本願海」と「群生海」と二つの海を並べます。海という言葉を使われるのは、私たちもイメージすることができます。私たちは、地球上の海は一つのはずです。ということは、海というものは別々に二つあるわけではありませんよ、ということを言いたいのだと思います。

仏教の表現がなぜ難しいのかといふと、

私たち人間が矛盾を一語で言いあらわす言葉を持たないからでしょうね。もし一つの言葉で表そうとしたら、例えば「如」としか言いようがない。だから、本来一つの現象を本願海と群生海と二つに開いて言葉としてわかるようにした上で、これらが実は矛盾しながら一つだということを教えるたいのでしょう。けれども、これでは単なる説明で頭で理解してしまうから、これは余談にします。

話を戻しますと、奉仕団から帰つてくるということはどういうことかというと、他化天の大魔王に支配された恐ろしい世界に戻つたんだぞということを知らされることですね。それを知らずに、この世間で悩みを無くしたいとか、あるいは助かりたいと思つてゐるとしても、そんなことはありえんと。この世間で悩みがなくなつたり真実を見つけるということはありえない。もし悩みがなくなるとしたら、他化天の大魔王に帰依して従順になつて、なんの疑いも無くなつたということなんです。他化天の大魔王に完全に支配されて、家畜のように生きるようなもんだぞつて、そういう恐ろ

しさでしょう。

■地獄一定とは

世界の現実を見抜いた言葉

この「五濁惡時の群生海」ということを、親鸞聖人は別の場面ではなんとおっしゃつてゐるか。『歎異抄』の第二条に、

たとい、法然聖人にすかされまいらせ、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう。

(六二七頁)

と、「法然さまに騙されて念佛して地獄に落ちても後悔しません。なぜかと言いますと、念佛以外の修行に励んでおれば仏に成れたはずだったのに、法然さまに従つて念佛をしたばかりに地獄に墮ちたのなら後悔もするでしょうけれども、『いずれの行もおかげがたき身なれば、とても地獄は一^{いち}定すみかぞかし』とおっしゃつています。

この言葉もですね、「もし地獄に墮ちたら騙されたと後悔するでしょう。しかし、いかなる修行も耐えられない自分は地獄に

「墮ちることになつても仕方ないのだ」といふうに、私は未来の話だと思つて読んでいたんですね。親鸞さんはこれから地獄に墮ちたとしても後悔しないというように。ところがそうではなくて、親鸞さんが五濁悪時の群生海と表現されることと重ねてみると、地獄に墮ちるだらうではなく、地獄にとどまると言いたいのではないでしょか。「とても地獄は一定すみかぞかし」というのは、「自分は地獄にとどまるぞ」濁悪時の群生海、この穢土にとどまるぞ」という親鸞さんの覚悟というか、この世には救いはないという現実というものを睨みつけているように聞こえるのです。

蓮如さんの『御文』の五帖目第一通に、

「末代無智の、在家止住の男女たらんともがらは」(八三二頁)といふお手紙があります。「在家止住の男女たらんともがら」とは、私たちに呼びかけておられるのですね。ところが「在家止住」と言われるとき、なんだか仕方なく在家中に留め置かれてしまっているように受け取っていたのですが、これも「地獄は一定すみかぞかし」の一定、地獄にとどまるということから考え

ますと、在家として生き抜くぞということを蓮如さんはおっしゃつてくださつてているのではないかと思うのです。私はこの御文がとても響くのですね、とても短いのでそらんじることができることもありますけど。なぜかということは後ほど触れますけれども。

ですから、念佛者が見抜いている現実をあらわす言葉なんだと思うんですね。他化天の大魔王、地獄は一定すみかぞかし、五濁悪時の群生海、そして在家止住と。

見よ、これこそ私たちが生きている世界の現実なのだと。

■宗祖としての親鸞聖人に遇う

私にとつては落ち着いて楽になつて生きていいし、できれば老後にちゃんと蓄えがあつて困らないように生きたいし、旅行に行つてのんびりしたりして、自分の周りだけを守つて、ああ北朝鮮は危ないなあとかな、シリアでミサイルが飛んで子どもたちが死んでいるというニュースを見た時だけ

仏たすけたまえともうさん衆生をば、たとい罪業は深重なりとも、か

ところが、親鸞聖人はどんな世界を見ていたのだろうという、その親鸞さんのまなこで世界を見る。私たちも親鸞さんと同じまなこでこの世界を見るようになることが、真宗を学ぶことのはずですもんね。

ですから、七百五十回御遠忌のテーマは「宗祖としての親鸞聖人に遇う」と掲げていますから、「親鸞聖人に遇う」といつても七百五十年前の親鸞さんに会うわけではないわけで、親鸞さんの目に映つていた世界、そういう世界を私たちもまた見ようと努めることじゃないかと思うんです。そこに「宗祖として」という意味があるのでしょうか。

なぜ親鸞さんは地獄にとどまろうとしたのだろうか。おかしいですね、浄土に往生して仏に成るという教えかと思つたら地獄にとどまろうとしたわけですから。

それはもう私も想像するしかないのですけれども、先ほどの「末代無智」の『御文』には、

ならず弥陀如来はすくいしますべし。これすなわち第十八の念佛往生の誓願のこころなり。

(八三一～八三三頁)

とありますて、阿弥陀仏の救いの対象は「仏よ、助けてくれ」と叫んでいる衆生であつて、それが称名念佛の教えの核心であると蓮如さんはおっしゃつてある。ということは、親鸞さん一人が地獄にとどまると言いたいのではなくて、地獄というのは、実はあらゆる人々が助けてくれと叫ぶ声が聞こえる世界のことではないでしょうか。そこにとどまるということです。

地獄にとどまつて地獄という現実を見据えないといふ声は聞こえてこないのでしょう。自分だけ温泉に入つて聞こえるわけないですもんね。自分だけがなんとか楽に生きたいといふところでは人の声が聞こえてこない。それは現実を見ないように、解釈して作りあげた世界に生きているということなんですね。逆に言えば、地獄にとどまる自分が阿弥陀の救いの対象なのです。そうすると、私たちが穢土で生きるとい

うのはどういうことかと言いますと、この穢土こそが本願がはたらいてる世界なんだということなんですよ。お淨土だけが佛法がはたらいてる世界で、こちら側は人間の腐つた世界ではなくて、お淨土に照らされた穢土が法の世界。お淨土だけに本願がはたらいてるんじやなくて、本願は穢土にしかはたらく場所がないのです。

うのはどういうことかと言いますと、この穢土こそが本願がはたらいてる世界なんだということなんですよ。お淨土だけが仏法がはたらいてる世界で、こちら側は人間の腐つた世界ではなくて、お淨土に照らされた穢土が法の世界。お淨土だけに本願がはたらいてるんじやなくて、本願は穢土にしかはたらく場所がないのです。

うのはどういうことかと言いますと、この穢土こそが本願がはたらいてる世界なんだということなんですよ。お淨土だけが仏法がはたらいてる世界で、こちら側は人間の腐つた世界ではなくて、お淨土に照らされた穢土が法の世界。お淨土だけに本願がはたらいてるんじやなくて、本願は穢土にしかはたらく場所がないのです。

入院生活は女性だけの六人部屋で、二十歳の方もおられたそうです。その若い女性は就職も内定して恋人もいて、これから無限の未来に自分が開かれていると思つていた。その希望の花が満開という時に乳癌が見つかつたのです。そして仕事も諦めて、恋人との結婚も諦めて、毎晩毎晩泣いてい

る。推進員の女性はそこで、「なんで私がこんな目に」「助かりたい」という声を聞きながら毎晩背中をさすつてあげている。病室で同朋の会をやつていたようなものですが、助けてくれという声を聞きながら。そのことを「ここには人間の現実がある」と表現された。

第一回講義でも紹介しましたが、桑名別院に勤められていた推進員の方に教えられたことです。その女性が亡くなるまでの一言一言が、私にとっては法語として繰り返し繰り返し思い出されます。病院にお見舞いに伺つた時のことです。彼女は「ここには人間の現実がある。外に出るとファイクションなの」と言われたのです。ここは

病院のことですね。ここには人間の現実があり、外に出るというのは退院することで、病院の外の世界はファイクションなのだと言つわけです。どういうことでしょうか。

病院のことですね。ここには人間の現実があり、外に出るというのは退院することで、病院の外の世界はファイクションなのだと言つわけです。どういうことでしょうか。

い。いつまでも生きられる世界だと。だから「自分の声が届かない。逆に孤独です」と言われるわけです。「自分はもう余命数カ月ということを宣告された身ですが、世間にすると、頑張って治療してね、と励まされるので、死ぬことを一緒に考えることができない。七十歳で死んでもまだお若いのに残念ですねと言われる世界ですから、孤独です」と。

それで私はどうしたか。その方が退院してまた桑名別院で見かけるようになり、あんなかだんだん小さくなつて白くなつていくなあと思いながらも、あいさつ程度で済ませていました。ところが、桑名市に西恩寺の池田徹さんという住職がおられるんですが、私をね、後ろから突つつくのですよ。はつきりとは言わないのですが、「お前、これでいいのか。あの人の声を聞かなくていいのか」と、私にはそう聞こえて責められているように感じました。私はそんな苦しみの声を聞くたくない。聞いても自分は答えられないから関わりたくないと思っているので、住職が「お前逃げてんじゃないか」と言いたいのだと感じたのですよ

い。いつまでも生きられる世界だと。だから「自分の声が届かない。逆に孤独です」と言われるわけです。「自分はもう余命数カ月ということを宣告された身ですが、世間にすると、頑張って治療してね、と励まされるので、死ぬことを一緒に考えることができない。七十歳で死んでもまだお若いのに残念ですねと言われる世界ですから、孤独です」と。

そうしたらですね、いろんな病を抱えていたり、お子さんを失ったお母さんも参加されました。僧伽ができたのです。「三帰依文」で「自ら僧に帰依したてまつる」の僧伽ですね。やはり親鸞さんの言われる地獄一定の世界というのは一つの僧伽の世界なんです。何か一つのグループができるのが僧伽じゃないのですね。声を聞くというより、私にとっては「声を聞け」という場所を与えられた。穢土に僧伽が生まれるのです。

生死の苦海ほとりなし
ひさしくしずめるわれらをば
弥陀弘誓のふねのみぞ
のせてかならずわたしける

(四九〇頁)

とありますて、この「ひさしくしずめるわれら」ということが「群生海」に重なるのです。この「ひさしく」という形容詞が恐ろしいのです。ただ長い時間沈んでいるということではなくて、もう当たり前になつてしまつて沈んでいることさえわからぬということではないですかね。岸辺からドボンと飛び込めば沈んだとわかりますよ。ところが、そうではなく、最初から苦海に沈んでいる。つまり群生海に生まれてきているので、そこが当たり前になつていて、沈んでいることにも気づかないのです。そういう世界をどういうふうに伝えられるかは難しいところですが、こういうことかと教えられた文章があります。

もう少し、穢土がはつきりしてくるといふことを押さえていきたいと思います。現代における真宗の教えの大切さにもつながるのですが、「五濁惡時群生海」の「群生海」というものを、私がどのように受け止めているかと言いますと、「和讃」の中に、

ました。大学の時にキリスト教の洗礼を受け、外務省では主任分析官にまでなり、宗教を知らずして民族を理解することはできないというようなことを言つてますね。政治家だけでなく、諜報部員や武器商人とも会い、世界の暗黒面に精通している佐藤さんが『悪の正体』（朝日新書）という本を書かれています。

■悪の法則

それを読んで特に印象に残った言葉は、「悪に対しても鈍感になる」ということは、他者に対しても鈍感になることです」と、ちょっとわかりづらい言葉ですが「集

合的無意識から生じる超個人的な悪」という言葉でした。一人ひとり自分が悪だとわかっていないところで、今現実に起こっていることは何かと言うと、例えば、沖縄の辺野古移転を巡る米軍基地問題。本土の人間は、ほとんど誰も痛みを感じていない。中国の脅威があるから仕方ないだろうと、痛みを感じなくなってしまっている。これが悪に鈍感になつているということだそ

佐藤さんは『悪の正体』の中で、

法則一、悪に無自覚であつてはならない・悪に無自覚な人は、自分でも気づかぬうちに人から恨みを貰つていており、憎しみの対象になつたりすることがある。悪に鈍感であれば、「他者の苦痛」や人の気持ちが理解できなくなる。人間と人間の関係の中から悪は生まれる。

です。一人ひとりが「自分は悪人だ」という意識がない。逆に「こいつが悪人だ」と決めつける。テレビでは一番視聴率を取る方法です。「こいつが悪人だからこいつを罰せよ」と真面目にやつてている。たいてい人が、会つたこともない芸能人のスキヤンダルに腹を立ててしまう。才能のある人を素晴らしい人として祭り上げておきながら、いつたん期待を裏切られると容赦なく非難する。ひどい場合は自殺するまで追いつめる。そういうことを誰もが真面目に正義感からやつて、テレビで毎日子どもに教えてますよね。

■「われら」の中に「われ」がない

「同朋会運動の挫折の原因」と文章があります。これは宮城顕先生の講義でして、京都教区での同朋会運動についての講義録に載っていたのですが、本が見つかりませんでした。

同朋会運動といいながら事実として生み出しえたものは仲間社会でしかなかつた。同朋会運動を通して常に生きる人々が、時代社会の中に開かれ、生きて歩んでいく。そういうことになつていかなかつた。その原因は何かといえば、私どもの観念性だ。観念性というのは何かというと、親鸞聖人は、末法五濁の有情、「五濁惡世の有情は」と常にうたつておられるわけです。また、「唯信鈔文意」には、「いし、かわら、つぶてのごとくなるわれら」というお言葉もあります。ところが、私どもは自分の現実、生活の事実と無関係なところでそういう言葉を口にしてしまふ。つまり、その言葉の中に具体的な人間の生活の現実というものを受け止められないときは、「いし、かわら、つぶてのごとくなるわれら」といいましても、そのわれらの中にわざが入つていない。一人の人間が、ものにまで追い詰められ、投げ出さ

れていくまでの歴史として受け止められる。そういうことが私どもに欠落していた。いわゆる歴史観の欠如。

これが端的に同朋会運動の挫折の原因だと宮城先生は押さえられております。観念性というのは何かといいますと、「われら」の中に「われ」が入つていない。世界を分析しているだけなのです。私も得意ですよ。「あいつはだめや、ここが悪い、こうすればよくなるのに」と分析しても、そこに自分が入つていない。群生海、しづめるわれらに自分がおらず、岸辺から見渡していると思い込んでいる。それを私はいつも金魚鉢の中の金魚にたとえています。金魚が、「この世つて本当に濁つとするよな」とか「あの金魚はダメやな」と言つて、同じ鉢の中で争つている。鉢の中の水 자체が濁つていて、その水の中で生きていながら、自分は鉢の外から見つめているつもりなのです。そこに「われ」が入つていないと云うわけです。



■レッテルを貼り、一極化される世界

『正信偈』を拝読して「五濁惡時惡世界」の言葉に触れると、「本当に腐った社会やな」「政治家も官僚も腐敗しとるわ」と文

身 我

句ばかり言っている自分がわかりますよね。

最近は安倍首相を英雄視している人と敵視している人、右と左のレッテル貼りが非常に盛んです。先日私が「でも安倍さんも外交では頑張っているんじゃないの」と言つたら「お前は右だ」と言われ、えつ、それで右になつちやうの、と驚きました。右だとレッテルの貼り合いをして二極化が進んでいるのです。安倍首相のこの政策は悪いが、この部分は良いという話ができるない。どっちかに決めつけて、全人格否定してしまう。先ほども言いましたが、テレビがやつているように、誰か一人を祭り上げておいて、スキヤンダルが起こると全人格否定して犯罪者のように扱う。STAP細胞の小保方晴子さんはその被害者だと思います。

そういうことをつねづね指摘しているのが、映画監督の森達也さんです。『ニュースの深き欲望』（朝日新書）という本がありまして、その中で、国際映画祭に自分が作った『FAKE』という映画が招待された縁で、国際映画祭に行つて講演し、世界の人々が『FAKE』という映画をどう受け

止めたか、という出来事を書いています。

森監督の『FAKE』という映画はドキュメンタリーなのですが、作曲家の佐村河内守さんを撮った映画です。私はテレビを見ないものですから、佐村河内さんを全然知りませんでしたが、ゴーストライターの件で問題になつたのですね。耳が聴こえない英雄としてNHKに取り上げられたけれども、実は耳も聴こえていた上に、作曲していたのは新垣隆さんという方だった。それで「騙された」といつてマスコミは、今度は徹底的に糾弾したのでしょう。

その事件後の佐村河内さんを森達也さんが映画に撮ったのです。ですから、観客はこの映画を見たら真相がわかると思ったわけです。一部引用しますと、

『FAKE』公開後多くの人から「眞実はどこにあるのか」と質問された。その質問は、眞実がどこかに存在していることを前提としている。だから僕は答える。「あなたの言う眞実など存在しません。全ての情報は事実ではなく解釈です」

（同書）一〇一頁

とありますように、私たちはこの世界には眞実があり、自分は眞実を知っているかの如く、これは間違っている、これは正しいと判断できると思っているのです。敵か味方か、正しいか間違っているか、というよううに善悪をつけたい。ところが、親鸞聖人は、

善惡のふたつ総じてもつて存知せざるなり。（六四〇頁）

とおっしゃる。何が善か悪かわからないというところに立つておられた。

現在の日本の状況で、森さんが懸念しているのは、集団化と二分化、分断です。右か左かという二極化と集団化。それをつき

つけるために、メタファーとして佐村河内さんを取り上げたと語っています。 私たちは真実を持っていて善と悪を見定める能力があると思っている。これを真宗では「自力」と言います。自力の執心、自分が正しく判断できると思っている。そうやって言い争いながらお互はずると沈んでいくのです。

■いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら

そのようなことをいろいろと考えながら、四月二十三日、仙台教務所のある東北別院で一泊の研修会があつたので参加してきました。講師は佐野明弘先生と佐々木道範さんという方です。佐々木さんは福島県二本松市の真行寺住職で、幼稚園も経営されています。

それで、佐々木さんが「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら」（五五三頁）という言葉を出されて、「自分はその言葉が本当に響いてきた」と言われた。どうして響いてきたのかというと、福島原発事故後は除染に追われる日々だったそうです。

とにかく子どもたちが放射能に汚染されないようにして、必死になつて除染作業に没頭し、また安全になるまで除染ができると思っていたのですけれども、ある時気がついたのです。間に合わないと。子どもたちに放射能を残していくしかないと思った時に、もう本当に闇の中。佐々木さんはそれを「絶望」と言いました。そんな軽々しく絶望という言葉は使えないとはわかつていても、絶望したと。

その絶望の闇の中にずっと籠つてとどまつて、そこから響いてきた言葉が「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら」だつた。国に捨てられ、放射能の中に置き去りにされて、その中で子どもを抱えたお母さんたちが「助けてくれ」と呻きながら生活動している世界を、そういう言葉で表現された。

■三願転入と自力の執心

最初に申しましたが、真宗の要是本願ですが、本願とは、これこれですと説明することではなくて、本願のはたらきを感じ取っていくしかないのだろうと思って、それであれこれ話しているわけです。私たちはどこか外に本願というものを置いて、それをどうやって見つけようかと探しているのですけれども、そうではないのです。すでに私たちは本願の中で生まれ、生きて、悩んで、死んでいく。今自分がその中にいるのだということの気づきなのですから。

ですから、教化事業でも「われら」とか「ともに」ということを枕詞のように使っていがるが、そこに「われ」が入っていない。厳しい指摘です。教団全体がそうでしょうね。同期会運動も勉強ばかりになってしまった。太田浩史さんにも聞いたことがあります。「同期会運動によつて先生ばかりが生まれた」とか「座談も消えて講義だけの研修会ばかりで、同期会運動は研修会運動になつた」とおっしゃつていたと思います。

その時に、親鸞聖人の生涯というところにもう一度戻つてみると、本願の人生といふものがあらわしているということでしたね。そして親鸞聖人の歩みに照らし合わせて、私自身の信心を批判していくのが真宗の学びですからね。

ところが、「信心を批判していくのが真宗の学びです」と言うと、「えつ、信心という言葉を使うのですか」と身構えてしまいます。みなさん、どうでしようか。もし「信心いただいていますか」と尋ねられたら、「私なんてまだまだです」と答えますか。それとも「信心いただいています」と言いますか。信心が話題になると「私なんてまだまだ」と思う。これは卑下なのです。仏教用語では「卑慢」ですから慢心と同じなわけです。私たちが普段自慢したり偉そうにしたりしているのが「過慢」。俺はできるぜも、私はまだまだでも慢心。

どうしたことかと言いますと、先ほどの推進員の女性を病院に見舞いに行つた時のことですが、質問された内容が「三願転入」についてだったのです。私は一応教科書的には説明しようとすればできだし、そ

れまでだつたら説明していたでしょう。ところが、彼女の問いは余命幾ばくも無いとわかっている人の問い合わせですね。今日知りたい、自分が死んで行ける、死んで行けるように教えてくれということです。

私は絶句しました。自分が今まで法話とかで真宗の教えをどういうふうに語つてきたかというと、解釈と説明だったと。そこに気づかされたのです。まさに「しづめるわれら」という状況で、二十歳の女性の慟哭の声を聞きながら、親鸞さんの本を読んでいる彼女に、私が解釈と説明をして何になるのだろうと。それで絶句して恥ずかしいと思った。その時の質問がこれなんです。

これを親鸞聖人の人生にあえて当てはめると、二十年間の比叡山での修行です。そこで仏陀の悟りを開くために修行して、煩惱を断じていく。そこでは、いつか到達するはずの悟りを目指して、まだ駄目だと、もつと自分を磨かねばならない。できないのはまだ自分の能力が開花していないからだと考える。

それでは修行は無駄かということではないですよ。本当のことを求めて自分の人生を充実したものにしたい、虚しく人生を終えたくないという宗教心。この宗教心 자체

私たちが「信心をいただいておりません。まだまだです」と言うのを、平野修先生

は第十九願の課題として「遠慮」とおつしやつてます。なぜなら、一見謙虚に思えるのですが、そこには何が潜んでいるのか」というと、いつか信心がとれるだろう、いつか眞実に出遇うだろうという、自分の能力を根拠と前提にしている。つまり「自力の執心」です。いつかわかるだろうというのは、自分に能力があるという前提がある。自分の中にもいつか目覚める種があるという自己肯定です。

も、阿弥陀さんの本願のはたらきですが、その願いは、不安とか虚しさとして私たちにあらわれているため、それが呼びかけだとはわからないのですよ。自分に能力があると信じている間は、不安とか虚しさを解決しようとするしかありませんし、そのためには聞法会に足を運ぶという宗教心も自分の意志だと思っているのですね。

■回心

ところが、自分の意志ではないことに気がつかないので、遠慮、卑下して、今はまだわからぬけどいつかわかるはずだ、いつも信心を手に入れて、というふうに努力して、一生懸命に山を登ろうとする。この自力のあり方を『歎異抄』では「日ごろのこころ」、「もとのこころ」（六三七頁）と表現しています。

けれども、その登る力が尽きる「時」が熟して、飲み続けていた漢方薬の効果、つまり念佛の智慧があらわれる。自分の能力を立場にしていたあり方を、自力であつたと目が覚めるのですね。「そうか、だから、

ただ念佛して弥陀に助けられよ、とおっしゃっていたのか」と。「いつか」が「すでに」へと転換する。お念佛は阿弥陀の呼びかけだったという発見ですね。

「日ごろのこころ」を教えられた。これを真宗の言葉では「回心」といいます。自分の能力でなんとかしようとする信仰心が破れて、日常の意識すべてが「日ごろのこころ」であったと初めて知るわけです。だから「もとの心」と言えるわけですもんね。佐々木さんの言葉ですと「間に合わない」ということです。自分の描いた希望・期待が木つ端微塵になつた時に、阿弥陀さんの第十九願が成就して第二十願に入る。

親鸞さんは、いつか悟りを得るという比

叡山の修行に二十年間取り組まれて、とうとう六角堂に百日籠つて九十五日目に回心をされたのですね。そして法然さんのもとへ行かれて、お念佛一つと定まつたのです。それまでは念佛もさまざまな修行の一つだったわけです。私たちもそうですけれども、こうやつたら幸せになれるかなとか、こうなつたらわかるかななど、世間に流布する方法を仕入れていろんな努力をしてきた

けれども、お念佛一つという方向が決まるということです。

それは本願の一端に触れたということですね。今までの苦労も無駄ではなかつたと、自分の過去が受け止められた。本願のはたらきで自分は歩んでいたと。ここで本願に触れるはどういうことかと言うと、本願が具体化して私に与えられていたことに気づくことです。阿弥陀の形なきお心が現実化して、身近な環境として私たちを導いていた。それが真実ということなのです。

■本願の現実化が三帰依文

法話の前に拝読します『三帰依文』でお話ししますと、本願が具体的な形をとったのが三帰依文の「仏・法・僧」ということです。

「大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし」とあります。念佛者の人生には三つの宝が与えられるということです。帰依というのは命令されて従うことではありませんね。宝ですから歎んで受け取るも

のです。

それでは「仏」とは何かといえば、親鸞さんでしたら、法然さんという先生を賜った。先生とは『恩徳讃』では「師主知識」と言いますね。その法然さんの背景には、さらにお釈迦さままでの歴史を感じているのでしょうか。「法」というのは、南無阿弥陀仏という法です。お念佛する身を賜る。称名念佛して生活していく。そして「僧」というのは、親鸞聖人にとつては吉水教団ですね。

私自身のことと言えば、学生だった頃から社会人になり会社に勤め、たくさんの方や年配の人にも出会いましたが、一度として一人も尊敬したことなどありませんでした。立派だなとか社会的に優秀な人だなというふうに評価をすることはあっても、この人には頭が下がりますという尊敬の念というか、尊い人だなど感嘆するということが一度もなかつたですね。

ところが、私にとってどのように先生があらわれたかと言いますと、私より私のことを深く知っている人がいるのだという驚きをもつてです。私は自分一人で悩んでき

て、人にも相談せず、その悩みは自分だけで解決しなくてはならない個人的な悩みと思つていたら、私と同じ悩みを私よりずっと深く掘り下げて、しかもその原因を人間の迷いとして追及して先に歩んでおられる人がいた。その驚きは同時に孤独ではなかつたという歓びでもありました。自分が悩んでいることはこういうことだったのかということを、すでに悩み抜いている人があらわれた。それを『歎異抄』の言葉で言いますと、

しかるに仏かねてしろしめして、
煩惱具足の凡夫とおおせられたるこ
となれば、他力の悲願は、かくのご
ときのわれらがためなりけりとしら
れて、いよいよたのもしくおぼゆる
なり。

(六二九頁)

うことです。が、ナンマンダブツと称えてあります。がたいということではなくて、自分が深く迷つて存在だということを知ることですね。もちろん私が深く迷つていることはわかっているつもりです。しかし、自分の中の真実なるものがいつかはつきりしたら解決すると思っていた。ところが、私は全く異なるものがいいという自覚が、法によって与えられるわけです。本当は何もわからない「無明」な存在であるということを教えられるだけではなく、教えられ続ける生涯なのでしょう。

そして、僧というのは友、法の友です。こういう聞法会で苦惱を語れる人に巡り会う。社会的立場や利害関係でなく、苦惱する者同士として付き合う。親鸞聖人でしたら地獄をすみかとして、助けてくれという声の聞こえる場所で人と出会う。

帰敬式の時にも三帰依文を唱和しますが、これは本願に出遇つたという信仰告白ですから、誓約ではありませんね。それを行儀としたのが三帰依文の唱和です。そこで「自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは」と、「願わくは」と出でますが、

これは私が願うのではなくて、私の願いごとなどというのは、宝くじが当たればいいなどということぐらいですから、人間の生まれながらの願いが起こってきたという感動なんです。本当は求めていたがらも、私自身が気づいていた願いが与えられる。阿弥陀の本願が「まさに願わくは」という私自身の願いとなつたということです。

■本願に背いている自分

最後に、同朋会運動の挫折ということとどうつながるのかをお話しますと、親鸞さんがおられた吉水教団も、実は「信心いただいた」「わかった、わかった」とか「お念佛ありがたい」ということで、お念佛する人だけの仲間になつてしまつたのだと思います。お念佛一つで救われた仲間たち。そうしますと、お念佛がわかつた人とわかつていらない人という分断が起こつくるのです。

これが二十願の課題で、平野先生は「得意」と押さえるのですね。自分は念佛で救われたという、そういうところにまた自己正当化がおこり、吉水教団も外との壁ができて、社会から敵視され弾圧されていくことになりますが、三願転入といつても、信心が第十八願に転換していくわけではありません。第十八願を背景として、第二十願の課題が知らされてくるのですね。ここで親鸞聖人は「自力の執心」という宗教の罠を問題にしているのです。念佛で救われたというあり方を批判してくる。念佛によつて人生を歎ぶことができた。ところが今度は、わかつた私を根拠にしてお念佛を私有化してしまう。わかつた側に立つて親鸞さんの言葉を振り回して、「われら」に「われ」が抜けていることにも気づかず、わからないう者に教えることになります。そういう信仰のあり方を批判していく。同朋会運動でたくさんのお念佛が生まれたと言われるのは、回心した人たちが先生になつてしまつたということでしょう。



賜つたのに、それを自分の能力と勘違いしてしまう。これを『無量寿經』では「三寶を見たてまつらず」（八三頁）として仮智疑惑の罪と説いてくださつてます。まさに「仏かねてしろしめして」ですよね。

阿弥陀の本願に背く者として、親鸞さんは生涯を仏弟子として歩まれたわけでしょ。本願に背いている私であることを教え続けてくださるのも、仏・法・僧の三宝なのです。（了）

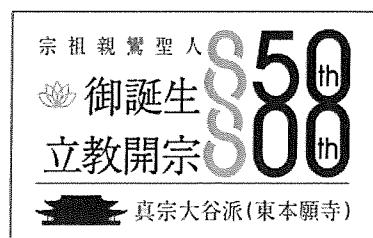
かめじゅうしょくの クリアファイルができました！

慶讃テーマを広くお伝えするために制作しました



お待ち受け大会
2022年5月21日(土)
井波別院にて開催決定！

当日、クリアファイルを
先行配布いたします！
是非ともご参拝ください！

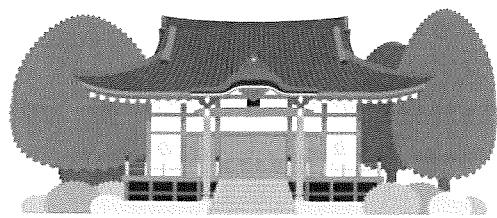


—<慶讃テーマ>

南無阿弥陀仏
人と生まれたことの意味をたずねていこう

【タイトル『我身』について】

「わが身」といいますね、あの「わが身」というものを正しく「わが身」といえるのはですね、やはりこの阿頼耶識ですね。阿頼耶識といふものは、このですね体ですね、この身といふもの——この身というものをですね、それをちゃんと見ていくものですね、公明正大な心をもつてわが身といふものを見ていくんですよ。わが身を見していく、と。わが身というのは、つまり阿頼耶識といふものは、すぐにはわからぬものはですね、すぐ——わが身といふとすぐになにか、そこへこう——ね、わが身といふと「わが身」といふのは軽いものだ」そういうて、この——すぐですね、わが身といふと私の、すぐ私有物のように考える。わたくしの私有物、わが身といふと私有物、ところがこの阿頼耶識でわが身といふのはこれ、公明正大な存在であります。



編集委員募集

ただ今、編集委員を募集しております。
ご協力いただけの方は教務所（担当 菊池）
までご連絡ください。

その人の性格や行きを見るにつけ響いてこない
という場合をよく目にします。そういう意味で
は、そのような死んだ言葉ではなく、数少ない
生きた言葉を届けてくださっている方のお一人
であるのかもしれませんと感じます。

(北條康惠)

発行者
真宗大谷派高岡教区教化委員会
発行所
真宗大谷派 高岡教務所

〒933-0912 高岡市丸の内2-15
TEL 0766-22-0464
FAX 0766-24-2215

E-mail
takaoka@higashihonganji.or.jp

東官士公派 (東本願寺)

真宗人各派（東本願寺） 真岡教区ゴロダ

高岡教区 フロント
QRコード



<https://takaokakyouku.net>

高岡教区教化テーマ にんげん 念仏者、悩みおおきに迷いなし

編集委員

黒川一紀(第3組隨順寺)
今井信悟(第3組正立寺)
北條康惠(第4組光證寺)
梨谷真嗣(第6組真行寺)

編集後記

私は、本山において何度か木名瀬さんにお会いしたございました。現在自分が知りうる